

夜あるき

永井荷風

青空文庫

余は都会の夜を愛し候。燦爛たる燈火の巷を愛し候。

余が箱根の月大磯の波よりも、銀座の夕暮吉原の夜半を愛して避暑の時節にも独り東京の家とゞまに止り居たる事は君の能く知らるゝ処に候。

されば一度ひとたびニューヨークに着して以来到る処燈火ならざるは

なき此の新大陸の大都の夜よが、如何に余を喜ばし候ささふらふかは今更いまさら申まをしあぐ上あるまでもなき事と存じ候。あゝ紐ニューヨーク育育は実に驚くべき

不夜城に御座候。日本にては到底想像すべからざる程あかるまばゆ明あく眩くらき電燈の魔界に御座候。

余は日沈みて夜来ると云へば殆ど無意識に家を出で候。街と云

はず辻と云はず、劇場、料理店、停車場、ホテル、舞踏場、如何なる所にててもよし、かの燦爛たる燈火の光明世界を見ざる時は寂寥せきれうに堪へず、悲哀に堪へず、恰も生存あたかせいぞんより隔離されたるが如き絶望を感じ申候まをしそろ。燈火の色彩は遂に余が生活上の必要物と相成り申候。

余は本能性に加へて又知識的にこの燈火の色彩を愛し候。血の如くに赤く黄金こがねの如くに清く、時には水晶の如くに蒼あをきその色その光沢の如何に美妙なる感興いざなを誘ひ候ふか。碧深みどりき美人の眼の潤ひも、滴したるが如き宝石の光沢も、到底これには及び申さず候。

余が夢多き青春の眼には、燈火は地上に於ける人間が一切の欲望、幸福、快樂の象徴なるが如く映じ申候。同時にこれ人間が神

の意志に^{もと}戻り、自然の法則に反抗する力ある事を示すものと思は
 れ候。人間を夜の暗さより救ひ、死の眠りより^{さま}覚すものはこの燈
 火に候。燈火は人の造りたる太陽ならずや、神を^{あざけ}嘲りて知識に誇
 る罪の花に候はずや。

さればこの光を得、この光に照されたる世界は魔の世界に候。
 醜^{しうかう}行の婦女もこの光によりて貞操の妻、徳行の処女よりも美し
 く見え、盜賊の面も^{おもて}救世主の如く悲壮に、放蕩^{ほうたうじ}児の姿も王侯の
 如くに^{けだか}気高く相成り候。神の^{さか}栄え靈魂の不滅を歌ひ得ざる墮落の
 詩人は、この光によりて初めて罪と暗黒の美を見出^{みいだ}し候。ボード
 レールが一句、

Voice le soir chermant, ami du criminel;

[Il vient comme un complice, a` pas de loup; le ciel]

[Se ferme lentement comme une grande alcouve,]

[Et l'homme impatient se change en be^te fauve.]

「悪徒の友なる懐しき夜は狼の歩み静かに共犯人の如く進み来りぬ。いと広き寝屋の如くに、空徐に閉さるれば心焦立つ人は忽野獣の如くにぞなる……」と。余は昨夜も例の如く街に灯の見ゆるや否や、直に家を出で、人多く集り音楽湧出るあたりに晚餐を食して後、とある劇場に入り候。劇を見る為めには非ず、金色に彩りたる高き円天井、広き舞台、四方の棧敷に輝き渡る燈

火の光に酔よはんが為めなれば、余は舞姫多く出で、喧かしましく流行はやりう歌たなど歌ふ趣味低きミュージカル、コメデーを選び申候。

こゝに半夜を費つひややがし臆おそて閉場のワルツに送られて群集と共に外に出るや、冷つめたき風颯さつぜん然として面を撲うつ……余は常に劇場を出でたる此の瞬間の情味を忘れ得ず候。見廻す街の光景は初夜の頃入場したる時の賑にぎやかさには引變ひきかへて、静しづまり行く夜の影深く四辺あたりを罩こめたれば、身は忽然見も知らぬ街頭に迷まよひ出でたるが如く、臃おぼろげ気なる不安と、それに伴ふ好奇の念に誘はれて、行手も定めず歩み度き心地こゝちに相成り候。

然り、夜深よふけの街の趣味は、乃すなはちこの不安と懷疑と好奇の念より呼び起さるゝ神秘こゝろに有これあり之候。既に灯ひを消し、戸とぎを閉したる商店

の物陰に人佇立^{たぐず}めば、よし盗^{ぬすびと}人の疑ひは起さずとも、何者の何事をなせるやとて窺^{ねが}ひ知らんとし、横^{よこちやう}町の曲り角に制服いかめしき巡査の立つを見れば、訳もなく犯罪を連想致し候。帽子を眉^{まぶか}深に、両手を衣囊^{かくし}に突^{つきこ}込みて歩み行く男は、皆賭博に失敗して自殺を空想しつゝ行くものゝ如く見え、闇より出で、闇の中^{うち}に馳^{はせすぐ}過る馬車あれば、其の中^{うち}には必ず不義の恋、道ならぬ交際^{まじはり}の潜めるが如き心地して、胸は訳もなく波立ち、心頻^{しきり}に焦立つ折から、遥^{あな}か彼方^{なた}に、ホテルやサルーンの燈火、更けたる夜^よを心得顔に赤々と輝くを望み見れば、浮世の限^{たのし}りの楽みは此処にのみ宿ると云はぬばかり。入りつ出でつ揺^{ゆらめ}く男女の影は放蕩の花園^{たはむ}に戯れ舞ふ蝶に似て、折々流れ来^{きた}る其等の人の笑ふ声語る声は、二云^{いひが}

難たき甘味かんみを含む誘惑の音楽に候はずや。

恐しき「定め」の時にて候。この時この瞬間、宛さなら風の如き裾の音高く、化粧の香かを夜気やきに放ち、忽こつじよ如として街頭の火影ほかげに立たちあらは

現まるゝ女は、これ夜よるの魂、罪過と醜惡との化身けしんに候。少女マ

ルグリツトの家の戸口に悪メフェイスト魔が呼よび出す魔界の天使に御座候。

彼女等は夜よるに彷徨さまよふ若き男の過去未来を通じて、その運命、その感想の凡すべてを洞察し尽せる神女に候。

されば男は此処にその呼び止とむる声を聞きその寄添よりそふ姿を見る時は、過ぎし昔の前兆を今又目前に見る心地して、その宿命に満足し、犠牲に甘んじて、冷き汚をじよく辱をじよくの手を握り申候。

余は劇場を出で、より更け渡りたるブロードウエーを歩みく

て、かのマヂソン広小路に石柱の如く聳立つ二十余階の建物をば夢の楼閣と見て過ぎ、やがて行手にユニオン広小路とも覺しき樹の繁り、その間を漏るゝ燈火を望み候。近けば木蔭の噴水より水の滴る響、静き夜に恰も人の啜り泣くが如くなるを聞き付け、其のほとりのベンチに腰掛け、水の面に燈影の動き碎くるさまを見入りて、独り湧出る空想に耽り候。

余は何者か、余に近く歩み寄る蹻音、続いて何事か囁く声を聞き候ふが、少時にして再び歩み出せば、……あゝ何処にて捕へられしや。余はかの夜の悪女と相並びて、手を引るゝまゝに、見も如らぬ裏街を歩み居り候。

見廻せば、両側に立続く長屋は塵に汚れし赤煉瓦の色黒くなり

て、扉傾きし窓々には灯も見えず、低き石段を前にしたる戸口の
 中は、闇立ち迷ひて、其の縁ペーズメント下よりは悪臭を帯びたる湿氣流
 れ出でて人の鼻を撲つ。女は突然立止まりて、近くの街燈をた
 よりに、少時余が風采を打眺め候ふが、忽ち紅したる唇より白き
 齒を見せて微笑み候。

余は覚えず身を顫はし申候。而も取られし手を振払ひて、逃
 去る決断もなく、否、寧ろ進んで闇の中に陥りたき熱望に駆ら
 れ候。

不思議なるは悪に対する趣味にて候。何故に禁じられたる果
 實は味美しく候ふや。禁制は甘味を添へ、破戒は香氣を増す。谷
 川の流れを見給へ。岩石なければ水は激せず、良心なく、道念な

ければ、人は罪の冒険、悪の楽しみを見出し得ず候。

余は導かるゝ儘に闇の戸口に入り、闇の梯子段を上り行き候。

梯子段には敷物なければ、恰も氷を踏ふみくだ砕くが如き物音、ひとけ人氣な

き家かちゆう中に響き、何処いづこより湧き出るとも知れぬ冷き湿気、死人の

髪かみの如くに、余が襟元を撫で申候。

二階三階、遂に五階目かとも覺しき処まで上り行き候ふ時、女

はかちくと鍵の音させて、戸を開き、余をその中うちに突き入れ候。

濃き闇は此処をも立たて罩め候ふが、女の点ずる瓦斯の灯ひに、秘密

の雲破れて、余の目の前には忽如として破れたる長椅子、古びし

寝台ねだい、曇りし姿見、水溜たまれる手洗鉢てあらひばちなぞ、種さま々／＼の家具雜然

たる一室の様、魔術の如くに現あらはれ候。室へやは屋根裏と覺しく、天井

低くして壁は黒ずみたれど、彼方此方に脱捨てたる汚れし寝衣、

股引、古足袋なぞに、思ひしよりは居心好き住家と見え候。

されど、それは諸君が寝藁打乱れたる犬小屋、若しくは糞にまみれし鳥の巢を覗見たる時感じ給ふ心地好さに御座候。

眺め廻す中に、女は早や帽子を脱り、上衣を脱ぎ、白く短き下

衣一ツになりて、余が傍なる椅子に腰掛け、巻煙草を喫し始

め候。

余は深く腕を組み、考古学者が沙漠に立つ埃及の怪像を打仰ぐが如く、黙然として其の姿を打目成り候。

見よ。彼女が靴足袋したる両足をば膝の上までも現し、其の片

足を片膝の上に組み載せ、下衣の胸ひろく、乳を見せたる半身を

後に反し、あらはなる腕を上げて両手に後頭部を支へ、顔を仰向うしろむかけて煙を天井に吹く様さま。これ神を恐れず、人を恐れず、諸有る世あらゆの美德を罵り尽せし、慘酷なる、將はた、勇敢なる、反抗と汚辱との石像に非ずして何ぞ。彼女が白粉と紅べにと入毛いれげと擬造まがひの宝石とを以て、破壊の「時」と戦へる其の面おもては孤城落日の悲壮美を示さずや。其そが重き瞼の下に、眠れりとも見えぬ、覚めたりとも見えぬ眼の色は、瘴煙しやうえん毒霧どくむを吐く大沢だいたくの水の面にも譬たとふべきか。デカダンス派の父なるボードレールが、

[Quand vers toi mes desirs partent en caravan,]

[Tes yeux sont la citerne ou `boivent mes ennuis.]

「わが欲情、隊商カラバンの如く汝なが方かたに向ふ時、汝なれが眼は病める我が
 疲れし心を潤す用水の水なり。」と云ひ、又、

[Tes yeux, ou`rien ne se re've`le]

De doux ni d'amer,

[Sont deux bijoux froids ou`se mele]

L'or avec le fer.

「嬉し悲しの色さへ見せぬ汝なれが眼は、鉄と黄金こがねを混合まじへたる冷き宝
 石の如し。」と云ひたるも、この種の女の眼にはあらざるか。

余は已すでに小春の可憐かれん、椿姫マルグリットの幽愁ゆうしゅうのみには満足致し得ず候。彼等は余りに弱し。彼等は習慣と道德の雨に散りたる一片の花にして、刑罰と懲戒の暴風に萎しをれず、死と破滅の空に向ひて、悪の蔓を延のぼし、罪の葉を広ぐる毒草の気概を欠き居り候。

あゝ悪の女王よ。余は其の冷き血、暗き酒倉の底に酒の滴るが如く鳴りひびく胸の上に、わが悩める額を押しおしあつ当る時、恋人の愛にはあらで、姉妹の親み、慈母の庇護を感じ申候。

放蕩と死とは連つらなる鎖に候。何時も変りなき余が愚ぐをお笑ひ下され度く候。余は昨夜いちや一夜をこの娼婦しやうふと共に、「屍しかばねの屍に添ひて横よこたはる」が如く眠り申候。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆」夜」作品社

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第7刷発行

底本の親本：「荷風全集 第三卷」岩波書店

1963（昭和38）年8月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜あるき

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>